

人間の経済

第2期 第 **56** 号 (通巻 134号) 2006年8月14日

目次

大銀行の前の小さなベンチで

エーリヒ・ケストナー/斎藤由紀子 訳

若者のために用意すべきもの

--ジョン・ラスキンふたたび--

森野 榮一

quote of this week/

美しき銭

森野 榮一

大銀行の前の小さなベンチで

エーリヒ・ケストナー/斎藤由紀子 訳

(Erich Kästner, Auf einer kleinen Bank vor einer großen Bank)

ドイツ人が勤勉なのは
いったい何のためだろう？
自身のためにことをなす、
それがドイツ式だ（ドイツ人は知っていることだが）。

貯金したって、だからといって、
後で何か得るわけじゃない。
ない、ああ、ないさ！
ただカネを預けているだけだ。

ぼくらにとって貯金は単純な楽しみ。
カネ自身は喜びをもたらさない。
決まって何年か後に
どっちにしろ、君たちが盗むんだ。

ぼくらの貯めたものを持ち去る！
それで時には放漫でペアだ！
他にもいくつも発明するんだ。
人を破産させるようなやり方を！

またもや君らは成功した。
またもやぼくらはピンボーだ。
ぼくらのカネは身罷った。
君らはどうぞお元気で。

晴れやかにぼくらは銀行の前に立つ。

貧困は苦勞の報酬だ。

どうぞ、どうぞ、感謝は不要！

心配ご無用、ぼくらはもう行く。

それに後悔も不要だ！

残念ながら悪事は露見した。

けれどぼくらは信賴している。

そしてまた改めて貯金する。

もう一度同じ目に遭うまで。

注釈：この詩は1931年夏の大きな銀行倒産に関連している。だが決して古びていない。

若者のために用意すべきもの

— ジョン・ラスキンふたたび —

森野 榮一

昼食をとりながら

我が住む町には工場が多い。いまそこで働く者たちは、臨時工だの、派遣だの、請負だの、雇用の契約はさまざまであっても、ほとんどすべてとってよいほど非正社員である。

私は昼になるとメシを食いに町の安食堂のような中華料理屋に行くが、そこで隣のテーブルに座った四人組。たまたま工場仕事を一緒にした人たちと見えた。三人は請負の仲間らしい。一人は派遣で来ている若者だ。請負の親方らしい四十がらみの男が、「メシ、おごるから好きなのを頼めよ」。若者は「え～、わるいすよ」と答えながら、誘われて食堂と一緒に来たのを後悔しているようにみえた。なぜならその表情に、なにを注文してよいか、張り出してある料理の値段を目で追いながら、困ったような雰囲気が見て取れたからだ。ふだんなら、コンビニでおにぎりくらいで済ませているにちがいない。それに較べれば、きっとどれも高かったにちがいないのだ。

「遠慮するなよ、これ、俺たちもとるから、お前もそれでいいな」と請負の親方ふうがいう。若者は遠慮がちに肯く。

「ところでお前、この会社、どれくらい来てるんだ。」

「そろそろ一年になります。」

「そうかい、空いてる時間があったら俺らと一緒に働かねえか。お前、携帯もってるだろ～、番号教えといてくれや。仕事の連絡いれるからよ。都合がついたらやってくれ。」

「携帯もってないっすよ。」

「え～、なんでもってねえんだ、みな持ってるだろー。」

「カネがないっすよ。」

「そうか、そりゃあうまくねえな、携帯ぐらい買えよ。お前いくらもらってるんだい。」

「時給1200円です。それだけ、他にになにもないっすよ。」

「相場はそんなところか、厳しいなあ、俺らと仕事すれば少しはいいかもな。その代わりあっちこっち回らなきゃなんねえけど…」

私は、1200円かあ、と隣のテーブルでラーメンをすすりながら、この言葉を聞いている。一日8時間で月20日働くとして9600円に20を掛ると192000円と計算してみる。アパートの家賃もいるだろう、生活に基礎的に掛かってくる水道代や電気代などもある、それらをひくくめて、さて、後に残るのは食費がやっとならぬ金額だ。携帯はたしかにもてないなあ、と。

働いている工場がどこか、私には分かるので、この若者が毎日工場で単純な仕事をしているとは思えない。つい十数年前までは正規雇用の労働者がこなしていた仕事だ。しかし会社は彼らをリストラし、同じ仕事をいまや労働コストの安い若者が不安定な雇用状態で手がけている。賃金が上昇していくことはない。いつまで働いても、収入が増える見込みはない。工場には、その若者がやめれば、違う若者がくる。そういえば、我が町に外国人労働者も増えた。彼の代わりがないわけではない。彼より安くても働く人間もいるのだ。

労働経済白書

いま若者になにになりたいかと聞くと、「正社員になりたい」と答える人が増えているそうだ。まことに切実な現実を反映しているといえる。

そう言う、論者によっては、若者が不安定な雇用の状態にあるのは、自分のしたいことを見つけるまでの猶予を生きている人がかなり混じっているのも事実だと指摘する。

たしかに、かつては己が夢の実現に向かってアルバイトでがんばったり、正規に就職せず自分に向いている仕事を模索するかのように臨時の仕事に従事する若者を見た。しかし、いま事はそのような状況からはるかに憂慮すべき事態へと進んでしまっていることを誰もが感じ始めている。

過日、発表された経済財政白書も労働経済白書も、はたまたOECDの対日経済審査報告も、格差社会と化した我が国の現状を問題視している。

そこでは格差のなかでも、とりわけ若年層のなかでの所得格差が懸念されている。その格差は正社員か非正社員かの差によってもたらされている。その格差は年齢を重ねるほどに開くので、格差のある社会をより固定化することにならざるをえない。

労働経済白書（「労働経済の分析」）で、厚生労働省は20代で年収150万円未満が増加し、全体の2割を超えた半面、500万円以上も増加したことを指摘している。ここで2割を超えたという20代の極めて低い所得条件に置かれた若者は、紛れもなく非正社員である。

そして年収150万といえ、月に直せば12万5000円である。それで基本的な衣食住が賄えるのか。月に20日、8時間働くとすれば、時給780円ほどだ。10人のうち2人がそのような条件に置かれている。他方で、正社員の地位を得た者は年収500万円を超える収入を得、そうした若者も増えている。格差社会の現実には若者において凝縮しているともいえる。

そうしてさらに懸念すべきは、非正社員化の趨勢である。平成4年以降10年間で、20歳から24歳で3倍、25歳から29歳で約2倍に増加している。非正社員がいかに急速に増えているかをこの数字は示しているが、これに対応するように年収150万円未満が15.3%から21.8%に増えているのだ。「正社員になりたい」とはもはや若者の悲鳴である。

こうした状況は少子化にもつながると厚労省は懸念している。しかし、その前に非正社員の状況に置かれた若者たちを心配するのが先ではないのか。

こうした状況を肌身に感じている若者であればこそ、「正社員になりたい」として極端に追い込まれた窮状を述べるほかない。天職を見つけ出すために彷徨っている状態は過ぎ去った現実になってしまっているのではないか。たしかに、人はその天稟を發揮すべきだし、若者ほどそうした意欲や望みを持っていて当然ではある。それが若者の口にしえない言葉になっているのか。仕事の中味は問わず、なによりもまず正社員になるを望まざるをえない。そうでなければ、生活の展望もせず、ましてや所帯をもつこともできない。それは、労働白書がいうように、正社員は6割が既婚であるにもかかわらず、非正社員の場合は、既婚は3割程度にすぎないという数字が示している。

あらためて我が国は昔から「人をしてその所得さしむる」を政治の要諦としてきたのではなかったかと慨嘆せざるを得ない。どの時代をみても、それが実現した試しはないのかもしれない。しかし、誰もが己が才や取り柄を發揮し、社会に貢献することで生活を維持しようにすること、それは社会の使命でなければならないはずだ。とすれば、この現実には我が社会がそれに失敗しているということだろう。

若者のために用意すべきもの

低廉な時給で働く非正社員は、歳を重ねても待遇が変わることはないであろう。かえって同じ条件の非正規の職さえ歳をとるごとに得ることは難しくなるであろう。つまり、若者たちの現実、時が行くほどに、格差が拡がり続け、固定化していく社会を予測させるのである。

ここで古い時代のある議論が頭をよぎる。19世紀中頃に英国のジョン・ラスキンが書いた『芸術経済論』での「吾々が青年の為に用意すべき物」に関する議論¹である。そこでの議論は芸術家を

¹ラスキン、『芸術経済論』、西本正美訳、岩波文庫230-231。昭和二年十二月刊。

目指す若者に関するものだ。誰もが芸術家になれるものではないし、才能があるわけでもない。しかしその成功が極めて限られたものであっても、若者のなかの少なくない数がこれを目指す。これに関するラスキンの議論は、今日の必ずしも芸術家を目指すわけではない若者の多くにも妥当するように見える。社会が芸術家を目指す若者たちになしうことはなにか。社会が芸術家を養成しようとしたところで社会はこれを作りださないとラスキンはいう。「芸術家と云ふものは何時でも、発見されなければならぬものであつて、作らるべきものではない」²からである。誰もが独自の才を天賦されてある。なかには高い芸術的能力をもつ者もいる。それを欠いていても別の才をもつ者もいよう。社会にとって問題は、それら「独特の天賦の才能」を見出し、それを利用すること、人からみれば才能を発揮しうることである。

もし、「偉大な芸術家には、その本来の芸術的能力の上に、更に他の有らゆる能力が併存してある事がある。従つて吾々はともすればその芸術的能力以外の能力をのみ利用して、その他に掛替へのない芸術的能力を眠らせて置く様な事もある。」³とすれば、社会は彼の賦有する黄金の才能を利用せず、却ってそれを抑圧・破壊していることになる。また芸術的才しかもたない人間の場合には、その才を発揮させなければ「第一流の所には達し得ないで終」⁴らせることになる。いずれにしても、その人間の才を発揮させる「本来の仕事をさせた時に於てのみ、それを利用し得る」のである。と。社会がそれをなしえない場合、社会は損失を被っているともいえる。

では、それを回避するために社会のなすべきことはなにか。ラスキンの答えはこうである。

才能の搜索発見のための学校

第一に、社会が若者に準備すべきは「いゝ画の師匠の仕事場と云つた様な」能力検定学校を主要都市に設けねばならないとラスキンはいう。そこでは、「師匠は若者達にその適所にぶつ突かるま

で、あれやこれやと色々の芸術をやらせて見る」べきだ。これは若者が己が才を発見する機会であると同時に社会にとっても、利用されるべき才能を発見し、磨き上げる手段でもある。

そうして第二に、「重要な事は余り骨の折れない安定した職業を与へる事である。」⁵これは生活の戦いのために青春の活動力を消耗させないためである。「相当な芸術家でも、職を得るまでには、大抵その心は拗げ、その天賦は歪められて了ふ。況んやそれが普通人であると、大抵動揺的な熱のない状態にあるのであるから、社会の要求のまゝに何事にも身を屈して、コツコツと金を溜め込んだり、下手な間に合せな画をかきなぐつたりして、晏如として世情の意を迎へる様になる。併し若しそれが偉大なる天才であつた場合には、必ずや社会と相争ふに至る。そして社会はその復讐として彼等をしてその前半生を窮迫の中に過さしめるのである。現在では如何なる画家でもその有する独創的天分に準じて、その前半生を悪戦苦闘の裡に送らねばならぬ道徳的確實性が増してゐるのである。そしてその思想が充実して精妙でなければならぬ時、その気分が穏和でその希望が熱烈でなければならぬ時—即ち最も重大な時期にある恰度その時に、その胸は不安や家事の苦勞で充たされてゐる。彼れは失望の爲めに意気消沈し、不当な待遇に憤慨する。斯くて彼れは自己の長所をも固執するであらうが、同時に矢張りその短所をも固執する様になる。そして彼れの信頼の蘆の折れる時、その目的の矢も鈍つて了ふのである。」⁶

事は芸術家に止まらない。今日でも安定した職業を得ることができず、「目的の矢」を鈍らせている多くの若者がいる。それは彼らの能力を発見しえず、発揮させぬことで社会は己が可能性の芽を摘んでいるようなものだ。若者は社会に参加し始めてすぐに、彼らがなんら社会に害を与えてはいないのに、復讐され「窮迫の中に過」ごさざるをえないからだ。だから、「吾々の主に必要とする事は不自由のない且つ安定した職業を与ふる事である。」⁷彼等に糊口の資を提供し、「その能

²前掲書、35頁。

³前掲書、36頁。

⁴前掲書、37頁。

⁵前掲書、57頁。

⁶前掲書、37 - 38頁。

⁷前掲書、38頁。

力を拒絶したり、鬱屈せしめたりしないで、それを十分に発揮する機会を与える」ことが重要である。これは何時にも変わらぬ社会の役目である。今日、不十分な雇用のもとに若者を放置しており、その数を増している趨勢をそのままにしているのであれば、多くの能力を発揮せしめぬ社会の低級さを表しているといつてよい。

称賛の公正を期す

しかし、若者には時に、若いゆえに社会の非難をえなければならぬ欠点があるのも事実である。社会はしかし、「その発達階段に於て自然で且つ不可避な欠点を捉へて、直ちにこの青年の本質的欠陥」として非難してはならない。むしろ批判的に批評すべきは、彼等が物事を等閑にし、拙速に流れ、だらしない場合である。⁸

そしてもし「彼れにして真に賞賛に価するならば、吾々はその賞賛に決して吝であつてはならぬ」とラスキンはいう。これが欠けていると、若者を正しい途から逸らす恐れがあるのみならず、社会のほうも、彼らの労作に報いるという至幸の特権を放棄することにもなるというのだ。

現在の我が社会は若者を真に賞賛する特権を享受しているか、もしそうしたいならば、若者をして才を発見せしめ、発揮させ、その成果をもたらしてもらわねばならない。そのように若者を処遇しているであろうか。新たな創造のみが社会を発展に導くとするならば、公平な賞賛が必要である。「凡そ人の賞賛を真に心から感謝し得るものは青年に限られてゐる」⁹からである。

私は老境にさしかかりつつある。これまでの人生で十分に処遇されたとは思わないが、なんとか生き延びてきた。そうした人間は、感謝に遭っても次第に喜びを感じる程度を減じてきているように思う。感謝を受け取る力は誹謗をものともせぬ感性の鈍磨の獲得とともに萎えていくものようだ。

ラスキンはこう言っている。

「老大家になつて後は吾々が如何程同情し、激励し、盛に喝采を浴せても、彼等は吾々の愉快的心持を疑ひ、賞賛を蔑視するであらう。」「彼等がその若き頃その大望の第一目標に突進した時若し吾々が「いゝ出来だ」と一言云つて遣りさへしたならば、その青春の浄楽不滅の天華咲き匂ふ牧場の競争に、彼等を元氣付ける事も出来、その顔に得意気な歡喜の血潮を漲らす事も出来たであらう。」¹⁰

たしかに、若者ほど、「その現世的成功慾の主なる動機が自己の満悦ではな」いことは確かである。それが「両親を悦ばすにある」からだ。

「その愛人の前で自己の価値が認められた時に、恋する青年の感ずる歡喜すらも、父母の歡喜を見た時のそれには及ばない。それは前者の歡喜が後者のそれ程純でないからである。即ち恋する青年の歡喜には、愛人を悦ばさうと云ふ純真なる欲望と、彼女の眼に自分をえらい者に見せようとする利己的な欲望とが混在してゐるのである。然るに両親の眼には少しも自分をえらい者に見せる必要がない。両親に自分の事業、自分の評判を知せに来るのは、唯だ父母を悦ばせ度いと云ふ純真なる希望からである。…」¹¹

私たちの社会は、若者を不安定な、鬱屈した、展望のない状況に置くことで、彼等に公正な評価を与えておらず、賞賛されるはずの活動をなしえないようにしている。労働白書は社会不安につながりかねないと懸念しているが、私たちはラスキンを読み返してみると、社会の質を懸念する気持ちが湧き出てくることになる。「採用・人事制度の柔軟化に向けた法的整備も含め、働きかけを強めて」¹²いくのも結構だろう。若者のために何を用意すべきか、それがこの社会の将来を決めるといってもよいと思う。

⁸前掲書、39頁。

⁹前掲書、40頁

¹⁰前掲書、40頁。

¹¹前掲書、41頁

¹²産経新聞、06年8月9日、朝刊

quote of this week

美しき銭

森野 榮一

カネは汚れたものだという考えは、昔は、根強いものであったようです。

特に武士は、カネをひどく卑しんだようで、直江山城守の話が有名ですね。彼は人が小判を差し出したとき、手で受けるのは汚いということで、扇子を開いて受けたといいます。武士は、さほどに金銭に手を掛けるのはよくないという道徳を教え込まれていたわけです。

しかしそうであるならば、カネなど差し出されてももらわねばよかろうと思えますが、この汚いカネがスキなのも人間なのです。扇子を開いて受け取ろうとさえしてしまうのです。カネがあればなんでも好きなものが手に入るし、それはカネの力を行使して楽しむことでもありましょう。なんにでも姿を変えうる力、それを汚いと教え込まれようが、だから要らないということにはなりません。

そうすると、カネが汚いわけじゃあない、それを汚くするもきれいにするも人間がしているんじゃないかと思えてきます。目の前に千円札を出してみれば、単なる紙、要は人間がそれに力を与えているわけですし、きれい汚いはそれを入手する仕方であり、また使う使い方であると気づきます。

ところで、それを手に入れて使うにつき、なかなか我が手許に回ってこず、貧苦に苦しむ人がいる反面、錬金術のごとく巨額を作り、動かす人もいる世の中になりました。間違いなく多くの人には前者でしょうし、私もその例にもれません。

そんな私には、貧しく苦しい人生のなかから出てきたことばに忘れられないものがあります。

かつて小城善太郎という俳人がいました。彼は明治43年に生まれ、暗い社会状況であった昭和10年前後に、青春時代を送り、自由律俳句の俳人として、プロレタリア俳句雑誌「旗」や自由律俳句誌「海紅」、「層雲」に句を発表していました。

大陸で従軍し、その疲労から病を得て郷里、宮崎に帰り、療養の生活を送ります。肺病でした。そして、療養のかいなく昭和27年5月、逝去。

彼の句は非常に表現力のあるもので、苦しい生活を送る自身にも心にしみるものがあり、時折、その句を読ませていただいています。

その彼が、死の三日前に詠んだ遺句がこれです。

蜜蜂を飼い美しき銭を得ん¹

病床で、蜜蜂を飼う仕事のなかにいるじぶんを思い描いている姿が浮かびます。そのしごとからもたらされ、彼の必要を充たすはずの銭は美しいに決まっています。

昨今とりわけ目立つ、公金にたかる姦吏奸商などにはとうていわからぬ一句でありましょう。

¹小城善太郎他、『美しき銭』、詩歌文学叢書V、詩歌文学談話会、昭和40年発行。

ゲゼル研究会では第二期「人間の経済」誌の原稿を募集しています。

ゲゼル研究会では会誌、「人間の経済」を刊行してまいりましたが、会員の各地に叢生する地域通貨の動きへの関与等により、刊行継続の体制がとれず、1年ほど休刊のやむなきに至っております。

しかし、社会経済状況の変化や多様化する各地の貨幣改革の展開を見るに、時宜を得た会員の諸研究を世に問う必要性を痛感しているところです。

また、各地からの問い合わせ、情報提供の依頼も多く、会としての系統的な情報の提供、焦眉の課題に関する研究成果の迅速な公開の必要性も強く感じてきたところです。

今般、体勢を立て直し、会誌「人間の経済」再開（第二期創刊）に取り組むこととなりました。

基本的な会誌の性格は第一期と変わるものではありません。

理論的な研究から各地の取り組みの現状、そのナマの声まで、多様なテーマの論考を掲載していきたいと考えております。

広く論考を求めていますので、諸姉諸兄のご支援、ご協力をお願いいたします。

第二期、「人間の経済」、簡易印刷版、及びHPでのPDF版提供

不定期刊

投稿資格 特に設けず

投稿 常時受け付け

投稿論文の著作権は著者に帰属

原稿料はありません

ご連絡は info@grsj.org まで。

人間の経済 第二期第56号(通巻134号)
2006年8月14日刊

編集・発行 ゲゼル研究会
221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野榮一気付
Gesell Research Society Japan
<http://grsj.org/>
info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず



ゲゼル研究会